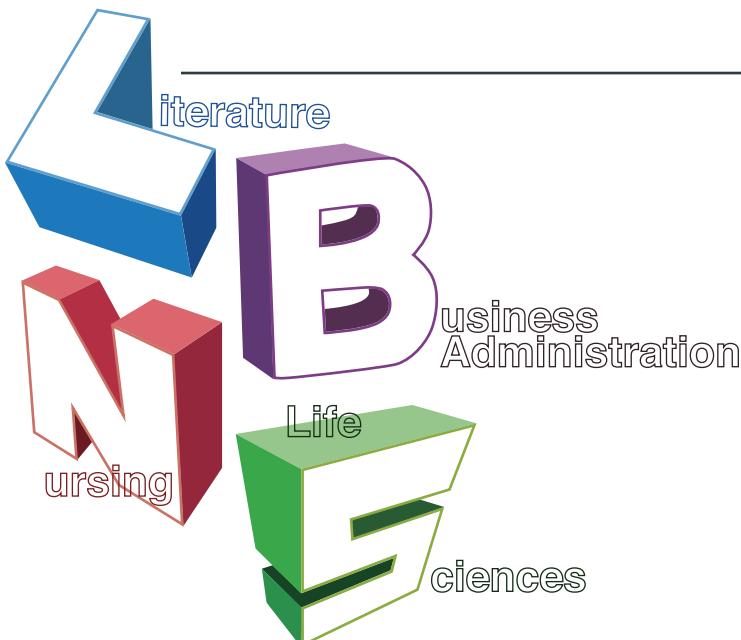


教育研究センター

Newsletter

2015

Vol. 3



目次

1. ニュースライン
2. 教育研究センター長 所感
3. 研究所報告
5. 大学院研究科報告
6. ICコロキアム報告
7. 研究業績出版助成
8. プロジェクト研究助成
11. 国内外教員研修
12. 教育研究センター、この1年

ニュースライン



●2015年度「ICコロキアム」活動報告

本学の将来を担う若手を中心とする研究会、ICコロキアムが開催されました。今回は、看護学部の後藤慶太先生と、文学部吉井涼先生が登場し、会場との活発な討議もあり、盛況の中に終えることが出来ました。

●プロジェクト研究助成

2015年度センター・プロジェクト助成(1年間)：看護学部渋谷えみ准教授による成果報告があります。新年度からは従来のセンター・プロジェクト助成を拡充させた新たな研究助成制度へと移行します。本学の研究活動がさらに活性化し、今後ともこうした成果が続いてくれることを期待しています。

●海外研修雑感

海外研修で、アメリカミネソタ大学看護学部に客員研究員として滞在している、松澤先生からは、同大学での先端的看護学・教育に接して、新たな共同研究への取り組みを始めたことのほか、実践や教育面での刺激が語られています。



「学術研究センター」発足への期待



教育研究センター長 柳沼 壽

教育研究センターが2013年4月に設立されて以来3年が経ちましたが、本年度のセンター運営にとって最も重要なことは、現在の「教育研究センター」を「学術研究センター」へと名称変更することでした。

「学術研究センター規程」は、本センターが本学の研究活動の中核になることを明確にすると共に、学内研究資金の助成対象者並びに外部の競争的資金の採択者をセンターの研究員として位置づけ、私学振興・共済事業団の補助金対象としての適格性を確保できるよう配慮したものです。

新たなセンターの運営に関する規程として設ける「学術研究センター研究推進経費助成規程」は、学内研究資金の助成に関するもので、学長が特別に指定する重点課題研究という研究種目を設定するなど、従来よりも対象とする研究領域・要件を緩和し、本学の研究活動全般の活性化を期待しています。ただし、新規程の承認手続き完了が年度末になりましたので、学内研究プロジェクトの募集が新年度になってしまふことをお断りしておきます。

科研費等の外部資金に関しては、発足当初より、申請手続きから採択案件に関する資金受払管理までセンターの研究支援機能業務として位置づけられており、毎年応募要領を更新して申請者の便宜を図れるようになりました。また、昨年7月からスタッフの1名増員が認められ、併せて本学における個人研究費管理業務もセンターが担うことになりました。現時点では手続き処理や対象経費内容等で競争的資金と個人研究費とに運用上の差がありますが、いずれは統一的処理を可能にして、業務の効率化を促進する必要があります。

また、昨年度は研究費の不正使用および研究不正行為に 対応するための規程と組織の整備が重要な仕事となりましたが、今年度は文科省による2015年7月の「大学等における産学官連携活動の推進に伴うリスクマネジメントの在り方に関する検討の方向性について」(中間報告)を受けて、大学等の研究機関は「利益相反マネジメントポリシー」の策定ならびに関連規程の整備に迫られるに至りました。これらに関する組織や規程の整備は、研究活動促進にとって

負担を強いる側面もありますが、本学の研究活動を高い倫理性と透明性の下に置き、より高次元の研究環境を整える装置として受け止めるべきものと考えます。

以上のほか、センターの本来業務とは異なりますが、本学における倫理審査委員会並びに動物実験委員会の事務局的機能を実質的に任されており、これらの組織運営に関して逐年厳格化する厚生労働省等の指針やガイドラインへの対応も求められています。倫理審査関連業務改善のために導入したシステムを新システムに次年度切り替え、一層の効率化を図ります。

最後に、センターは新年度から「学術研究センター」として本学の研究機能と支援業務の核となって動いていきますが、今後ともこれら両機能の強化を図りつつ、周辺業務をこなしていくためには、増大する業務量を少人数で効率的にこなす体制に持っていく必要があります。皆様のご協力をお願いする次第です。

なお、本学の2015年度における科学研究費獲得、センタープロジェクトの実績は以下の通りです。

科研費応募・採択実績

科研費新規応募件数	15件
同新規採択件数	3件
同採択件数(含継続・移管)	18件
同資金配分額	11,436百万円

センタープロジェクト採択実績

新規採択件数	3件(1年間)
継続件数	1件(3年間)、1件(2年間)
総件数	5件

本学の実績は県内10大学で見れば下位、7つある私立大学で見ればほぼ中位にあり、今後は一層外部研究資金の導入を図り、本学の研究水準の向上を目指さなければなりません。

また、採択されたセンタープロジェクトは終了後に科研費に応募することとなっており、本学における外部研究資金の増加につながっていくものと期待されています。

(やぎぬま・ひさし：経営学部経営学科・教授)

研究所報告

2015年度子ども未来研究所活動報告

～地域の子育てを支える～

子ども未来研究所長 原 口 なおみ

聖路加国際病院顧問の細谷亮太先生をお招きして、6月28日に子ども未来研究所の第6回の定期講演会(看護学部看護学科並びに文学部児童教育学科共催)が開催されました。「いつも子どものかたわらで」と題して、小児がんの子どもを支えるトータルケア体制構築の30年余を振り返り、医者・病棟看護師・薬剤師・栄養士・小児心理士・病棟保育士・訪問看護師・教師・チャップレンなど、病児に関わる様々な分野の専門家が、それぞれの立場から、対等の関係で、その子を支えるために話し合う「金曜会」での事例検討から、具体的な経験と結びついた実践的な知恵が蓄積されてきたと、お話を下さいました。

ルケア体制構築の30年余を振り返り、医者・病棟看護師・薬剤師・栄養士・小児心理士・病棟保育士・訪問看護師・教師・チャップレンなど、病児に関わる様々な分野の専門家が、それぞれの立場から、対等の関係で、その子を支えるために話し合う「金曜会」での事例検討から、具体的な経験と結びついた実践的な知恵が蓄積されてきたと、お話を下さいました。チームとして事例を検討しながら、一人一人の子どもの人生と向き合うなかで、専門家として成長するというお話しは、保育者や看護師、管理栄養士やケアマネージャーなど専門家として、地域の人々の暮らしを支える卒業生の学びの場を作りたいと考える子ども未来研究所にとっても、示唆に富んでいました。

夏休み中の8月18日・19日の夜、14年6月に「子どもの育ちとメディア環境」の講演をして下さった山田真理子先生に「プロ保育者のためのワークショップ」を開いていただきました。本学卒業生を中心に、現役保育者・児童相談所職員・教員など子どもに関わる職業に就いている22名が、2夜連続で参加しました。初めて出会った仲間と「のはらうた」の詩を使って自己紹介。園でのあそびや、お母さんたちの仲間づくりにも活用できそうな表現遊びで気持ちをほぐした後、「あなたの一言」一人称ワークで、子どもの立場から、保育のことばをチェック、さらには、職場で直面している事例を山田先生にご相談する形で、大人の世界に無防備に晒されている子どもの傷みについて、また福祉分野と保育現場の連携の必要性・その道筋など、今、子どもの直面している問題・保育者の課題について話し合いました。「一人称ワークで見直した関わり方を踏まえて接したところ、子どもの表情が変わって驚いた」「表現遊びの中で、たくさんのことばを感じ、言葉にならないことばによっても伝わるのだと実感した」など、忙しい勤務の後に参加してよかったとの感想が寄せられました。様々な立場



で子どもに関わる人と率直に意見交換し、子どもとの向き合い方を考えるこのような場を、継続して設けて欲しいという期待も寄せられました。

12月17日には、第6回OBによる仕事の実践報告会として、日立市役所職員として生活保護費支給窓口で働く、生活科学部心理福祉学科卒業生渡邊裕太さんにおいでいただき、仕事の中で直面している現代社会の問題について、学生に話していただきました。

今年度は、学外からの要請を受け、子ども未来のメンバーが協働して子育て講座を二件行いました。10月22日から11月6日にかけて、7人の異分野の所員が1回づつ担当して県西生涯学習センターで、茨城キリスト教大学子ども未来研究所いくじい・いくばあ講座を実施、さらに県医師会からの要請・子ども未来研究所の立案で、11月14日に本学、1月27日には県西会場、2月13日には県南会場での医師保育支援事業センター研修会を実施しています。異分野の教員が集って子育て支援に取り組む組織はめずらしく、受講者からも、多方面の話が聞けて興味深かったが、さらに時間をかけて深く学ぶ機会がほしいとの声がありました。

さらに、平成27年度「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)」の一環として、2月2日から3月15日までの毎週火曜日、学生・教員と子育て世代の出会いの場「アンネローゼ子育てカフェ」を開くことが決まりました。2月8日には、キリスト教のバッックボーンを持ち、地域の環境を活用した森の保育に取り組んでいる公益財団法人キープ協会清里聖ヨハネ保育園での研修視察、さらには3月10日に、大豆生田啓友玉川大学教育学部教授にお出でいただき、子育て支援の現状と大学の成すべきことを考える「COC+事業・茨城キリスト教大学キックオフシンポジウム～大学から子育て支援を考える～」の開催を予定しています。来年度も、地域連携推進センターと協力し、一つひとつの活動を丁寧に実施し、地域の子育て環境を、より幸せなものにするため努力したいと考えています。



(はらぐち・なおみ：文学部児童教育学科・教授)

不思議「カウンセリング研究会」

カウンセリング研究所員 立木 徹

研究会は金曜の夜に2時間にわたって行われている。夏でもほとんど休むことなく年間で40回にもなる。驚異的／奇跡的といったらよいのか、狂っていると言つたらよいが迷う。この不思議研究会について今回は報告したい。

内 容

その内容は、ケースやロールプレイの検討、自己分析の報告などである。

筆者はロールプレイのクライエント役をやったことがある。初めは緊張して余裕がないため、自分の学生時代の姿を思い出しながら演じた。余裕が出てくるとカウンセリング役を少し困らせてみようかとか欲が出てくる。しかし、言葉や態度に矛盾が生じたりすると嘘っぽくなってしまう。心理ケースについての知識とそれを演じる能力が必要だと実感した。その意味ではクライエント役をやることもよい学習の機会だと思う。

参加者／発表者

プライバシーがあるので具体的には言えないが、まずは鈴木研究所長とX氏に皆勤賞が与えられるだろう。病気になろうが強風が吹こうがやってくる。それ以外の参加者は、研究所のスタッフや本校の大学院を卒業した面々である。古くからあり、同志的結合の強い研究会はどこもそうだろうが高齢化が目立っている。本研究会も例外ではない。そのため、若い人は参加しにくいかもしれない。

発表はズバリ言って自主的のものである。発表したいと思ったら事務室の黒板に名前を書くだけである。早いもの順である。発表者がいない時はどうするかと心配する人やそのような加減なことでいいのかと思う眞面目人間もいるかもしれない。しかし困ったことはほとんどない。私は発表者がいない場合を考えて、予備の発表資料を事務室のロッカーに入れておいてもらったことがある。ある時その機会が訪れたが、それはそれで面白かった。

公開講座などへの還元

私が企画や担当者として関わった公開講座・シンポジウムを以下に報告する。研究会の成果がここに生かされている。

【学科シンポジウム】

現代心理学の挑戦(2011)、生と死(2013)

【県民大学講座】

人間関係の深層(2010)、不安(2011)、アートの心(2012)、心のゆとりを求めて(2013)、女と男(2014)、コミュニケーション(2015)

研究／教育／実践／地域とのつながり

研究会で得られた経験をどのように活用するのがよいのだろうか。問題の一つは、場面ごとにその期待や要求が異なる点にあるだろう。研究では同種のテーマに関心を持っている研究者、教育では主に学生、実践ではクライエント、地域とのつながりでは講座参加者が関わる。それぞれの状況に対応した話題提供や表現が必要になる。当然のことながら、研究を全ての状況に対応づけるのは難しい。専門性が高くなると興味を持つ人が少なくなるなど、相互に矛盾する関係があるからだ。

しかし、現代の研究にはこれら多様な状況への対応が求められている。研究のハードルは高い。これを越えるには、どうすれば研究の成果を教育や講座にも関連づけられるようになるかを考え続けなくてはならない。この困難な挑戦を面白がれないと研究は行き詰まるのではないだろうか。

発表する心理と話し合いの雰囲気

【話したい切実感】

発表者の心理は一体どのようなものだろうか。私の所属する学科でのFDでは、発表者の依頼で苦労した。それに比べると、ここでの発表者の熱意は比べものにならないほど強い。その違いが非常に気になる。

一つの違いは、メンバーへの信頼があり、周りの目つまり批判されることへの恐れが少ないからではないだろうか。それに対し大学教員は自尊心が非常に強く、批判されたくない気持ちが強いのかもしれない。それともメンバー不信があるのだろうかなどとも考えたが答えは出でていない。

もう一つは、どうしても発表したいという切実感である。研究会の発表者には実践の中で困っていることがたくさんあり、相談したい気持ちが強いのかもしれない。この研究会はその人たちが主役になって支えている。逆に言えば、そのような気持ちを持つメンバーがいなくなったら時に研究会は消滅することになる。

【自由な雰囲気】

話し合いは討論、尋問、指導などが持つ緊張した雰囲気でなく進む。時に厳しくなることもあるが、和やかでありリラックスしている。メンバーがカウンセラーだからだろうか。私は今でもこれに慣れてなくて、時々議論的、論理追求的になってしまうことがあり、その修正に苦労している。

発言の多い少ないはあるものの発言は自由になされている。ただし、当然ながら発言に対して批判がなされる場合がしばしばある。批判に対して怒ったり泣いたりする場合もないわけではない。実にドラマチックである。怒りやその他の不快な気分から会に参加しなくなるメンバーも過去にはいたかもしれない。嫌なことがあったとしても研究会に参加しようとするメンバーもいて、それには驚くと同時にすごいと思う。

発表中に聞き手が眠ったり、ケイタイをいじったりする場面に出会うことがあった。いわゆる眞面目な人ならば呆れ、怒るかもしれない。カウンセラーたちは優しくてそれを叱ったりはしない。だから研究会に参加するのかもしれない。

ここにゾクゾクする廃屋が煌めいている。ハクション！

(たつき・とおる：生活科学部心理福祉学科・教授)

大学院研究科報告

大学院生活科学研究科食物健康科学専攻の取り組み

大学院生活科学研究科長 川上 美智子

大学院生活科学研究科食物健康科学専攻は2011年4月に設置され、5年が過ぎようとしている。本研究科は、茨城県で初の食物系の修士課程であるとともに、栄養教諭の専修免許と中等教育家庭科専修免許資格の取得が可能なため、社会人が積極的に入学している。これまで4名の修了生を輩出し、現在6名の学生が在籍中である。

大学院では、ヒトが摂取した食べ物が消化・吸収され、さらには代謝を受け、健康維持や疾病予防を果たすメカニズム等について、未解明の領域の研究にチャレンジしているところである。

2015年度は、第13期中期経営計画で掲げてきた海外大学との交流と共同研究の推進など国際化戦略の一環として、8月には大学間連携協定を結んでいるアメリカ・カリフォルニア州のU.C.Davisに大学院生を含む4名で訪問し、The college of Agricultural and Environmental Scienceの7名の教授と意見交換を行い、交流を深めた。今後、多くの教員や院生が、研修先として利用することを願っている。また、9月には、昨年に引き続き、連携の労をとってくださっている柴本崇行distinguished professorをお招きし、FD研修会を開催し、「Research in U.C.Davis」の演題で英語による講演会を行った。柴本崇行教授とは、「オレンジニンニクの機能性研究」のテーマで共同研究協定も結んでいた。オレンジニンニクの機能性研究では、梶田泰孝教授を中心に、動物実験を基本とした血中成分や臓器中の標的遺伝子発現の変化などから作用機序の解析を行っている。また、オレンジニンニクの成分については、川上研究室の堀江隼人院生を中心dially trisulfideの挙動について分析を行っている。このよ



U.C.Davisで意見交換と交流

うに、2013年度に始まった海外大学との交流を一層、密にしているところである。

現在在学中の院生の研究を以下に紹介する。深津研究室の三田寺里美院生は、ヒト由来細胞の培養技術を学び、食事と生活習慣病等疾患の関係についての研究に取り組んでいる。また、川上研究室では見目美穂院生が和製烏龍茶の香気分析に、渡邊光子院生が緑茶香気の総合的研究に取り組んでいる。山口清美院生は、川上・桐井の指導のもと勤務先の水戸高等特別支援学校において給食残食と生徒の健康状況について調査を進めている。根本勝子院生は、村上研究室で食の安全に関する研究を行っている。さらに、次年度には、中村研究室、桐井研究室、深津研究室に院生が入学する予定であり、地域における大学院の役割が大きくなっているのを実感している。

細胞観察中の
三田寺さん
(深津研究室)機器分析中の
堀江さんと
渡邊さん
(川上研究室)

(かわかみ・みちこ：生活科学部食物健康科学科・教授)

コロキアム報告

2015年度「ICコロキアム」活動報告

主催：IC若手会、茨城キリスト教大学教育研究センター

IC若手会 中村和照

■ICコロキアムの趣旨

ICコロキアムは、本学の教員が最新の研究や教育の成果を発表し、これを参加者である本学の様々な専門領域の教員で共有することにより、互いに専門的知識を高めあうことを目指し年に数回開催しています。また、ICコロキアムでは、アカデミックな場での交流を通して教員間のつながりを深めるとともに、本学における新たな学際的研究へつなげていくことも目標としています。

ICコロキアムは、2008年度から定期的に開かれてきたIC若手会による定例研究会を前身としており、2013年度より現在の名称に変更して新たにスタートしました。名称変更の目的は、年齢、所属および専門領域に関係なく多くの方々に参加していただくことでした。昨年度は、多くの教員、大学院生および学部生に参加していただくことができ、名称変更の効果を得ることができました。

2015年度は、2月にICコロキアムを開催しており、以下にその内容について報告いたします。

■2015年度 ICコロキアムの報告

2015年度のICコロキアムは、2016年2月19日に開催し、看護学部看護学科 後藤慶太先生（第一部）と文学部児童教育学科 吉井涼先生（第二部）から研究活動について、ご発表をいただきました。

第一部(13:30~15:00)

「疾患および症状を予防・改善する

積極的看護介入方法の確立に向けて」

発表：後藤慶太先生

後藤先生からは、糖尿病の患者さんは、生体の恒常性を保つ自律神経の活動が健康な人に比べて低下していること、慢性腎臓病の患者さんでは、交感神経活動の亢進が起こることによって、心血管および腎臓自体が障害される悪循環を生んでいることが研究の背景にあると説明をいただきました。実際の研究では、安静時の副交感神経の活動を高めるための看護介入方法を検討しており、発表ではこれまでの研究成果についてご紹介いただきました。我が国では、糖尿病の罹患者の増加が問題となっており、特に茨城県北地域においては、慢性腎臓病の有病率が高くなっていることから、参加者の関心も



高く、今後の研究について期待する声も多く聞かれました。

第二部(15:15~16:45)

「障害児教育史の研究

－障害のはっきりしない子どもの歴史－」

発表：吉井 涼先生

吉井先生からは、19世紀末以降のアメリカ合衆国における障害の存在が明確でない、通常教育と特殊教育の狭間に位置



してきた子どもを対象とした障害児教育史について、3人の教育学者・心理学者の思想を中心に研究発表を行なっていただきました。障害児教育に関する歴史については、2013年度のICコロキアムで文学部に所属していた宮内久絵先生から、イギリスにおける視覚障害に関する教育史について発表をいたしました。二人の発表から、国や障害の違いによって、どのような教育史の変遷があるかを考える機会になりました。発表後には、日本の教育現場の現状や今度の課題についても議論が行なわれ、学内での障害児教育への関心の高さが伝わってきました。

■今後のICコロキアムについて

2013年度からICコロキアムに名称を変更してから、4回の研究会を開催することができました。4回の研究会を通じ、研究内容について専門領域の枠をこえた意見交換が行なえたことや研究に取り組む姿勢についても議論が進んだことは、今後の学内の研究活動を更に発展させていく良い機会になっていると考えています。

2014~2015年度は、年に1回のみの開催となっていましたが、次年度以降は学内での研究発表の機会を増やすために年に2回程度の頻度でICコロキアムを企画・開催して行きたいと考えております。ICコロキアムは、研究の紹介だけではなく、参加者がどのような視点で研究に取り組んでいるのか等についても意見交換ができる場所です。各教員が研究内容を紹介することによって、学生が他分野の研究に関心を持つ機会にもつながると思いますので、多くの先生方の発表をお持ちしております。(なかむら・かずてる：生活科学部食物健康科学科・准教授)

研究業績出版助成

書評：「ある国語教師」の道程 『国語教師・青木幹勇の形成過程』

大内 善一著

文学部・教授 田代尚弘

国語科の優れた授業を行ってきた多くの先人は、その授業実践において試行錯誤をくり返しながら、授業の実践理論を追求してきた。青木幹勇もその一人であり、昭和戦前期から戦後期までを国語教育ひと筋に生き、国語教育の実践と理論において、大きな業績を残した国語教師である。かれは、東京教育大学附属小学校を退職後、晩年に至るまで、現場からの求めに応じて教壇に立ち続けた。

著者は、国語の授業実践に生涯をかけた青木幹勇が、その「ライフコース」を通じて、いかにして「国語教師・青木幹勇」になり得たか、いかにして独自の「国語科教育の実践理論」を創り上げるに至ったかを克明に追っている。著者の研究の動機は、青木が「時流に便乗することなく、その時の流行の教育現象に目を奪われることもなく、授業の実践研究を長期にわたり追求」した姿勢への共感と、青木の授業実践研究の戦後的な意義を明るみに出そうとしたことである。

本書の特徴は、青木幹勇の国語授業の多岐にわたる実践資料を二部に構成し、青木の「読むことと書くことの一体化」という国語実践理論への道のりを、余すところ無く説得的に描き出している点である。青木幹勇の「国語教育評伝」といってもよいだろう。第一部「国語教師・青木幹勇の形成過程」は、青木の国語教師としての出発から戦後期に至る「国語の授業実践」をクロノロジカルな視点で編成するとともに、他方で俳人でもある青木の「俳句」や「詩」の創造的な授業実践、さらには青木の主宰した研究グループ「青玄会」の教育活動、青木の「NHKラジオ国語教室」を取り上げている。第二部では「青木幹勇国語教育論」として、青木の提唱した「読むことと書くことの一体化」が分析され、青木の授業実践理論の核心と意義が明らかにされている。

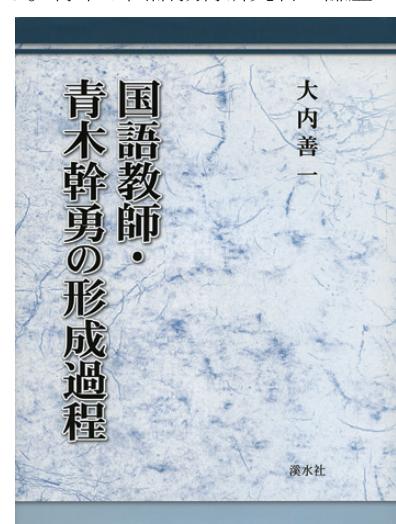
青木が青年教師時代に大きな影響を受けた主な人物は、「生活綴り方教師」の木村寿、「芦田教式」を創出した芦田恵之助、古田 拡等であった。青木は、木村の影響で「生活綴り方指導」にのめり込み、芦田恵之助の「芦田教式」の「書く」学習に傾倒し、古田からは「国語科授業の創造」と「授業実践の覚悟」を学んだ。青木は自分の師ともいいうべき先達の授業実践から多くのことを謙虚に学び続けたが、かれらの理論に埋没することなく、「生活リアリズム作文」から「フィクション作文」への実践と理論に到達した。著者は、青木が経験に安易にもたれかかることなく、また、理論に没せず、独断に陥ることもなく、日々の国語教室の営みの中から実践理論を生み出した点を評価する。

青木の国語教育の特質は、国語科の「読解」の学習指導に「書く」活動を導入し、その機能を究明したことである。

青木は「読解学習」のさまざまな場面における、「聴きながら書く(聴写)」「メモをとる」「書抜きする」「筆答する」「書き込むする」「書足しする」「書きまとめする」「質問・意見・感想を書く」という「書く活動」の重要性を提案した。この提案は、「発間に依存する授業」から「一人ひとりが、考える時間をもち、創造をひろげられるような学習」への転換でもあった。著者は、青木のこの提案を「戦後の国語科教育のあり方に一石を投じた」と評価する。青木の国語科授業における「書くこと」の意義は次のような点であるという。1) 戦後の国語科教育における「読解学習」が見落としていた「書くこと」の機能を拡大し、「読むこと」「書くこと」「考えること」の一体的な関連を実践的に明らかにしたこと。2) 従来の「書写」「作文」の他に、「視写」「メモ」「書足し」「書換え」などの多様な「書く活動」を「読むことを支える活動」として位置づけ、3) 作文素材を「読解学習素材」(物語文、詩歌、説明文、伝記等)の中に探し、「フィクション作文」への発展を実践的に切り開いたこと。4) 「読むことの学習」を「作文の学習」へと転回させる契機をつくったことである。この青木の国語授業理論は、子どもたちと共に学び、さまざまな試行錯誤をくり返すことであつたものであり、「国語科教師教育の研究にとっても貴重な拠り所」であるといふ。

「国語科教育学」の第一人者として活躍している著者は、自らの研究者としての歩みを、青木の「道程」に重ね合わせているようにも思われる。青木が国語教育研究者に謙虚に学んだように、著者もまた、真摯な努力を重ねた「国語教師」に、教師として学びの「導きの星」を見ている。こうした「導きの星」があつてこそ、明日への教育活動への道標と「希望」も見えてくるのであろう。本書は、ひとりの「国語教師」の生き方に「極北の星」の輝きを映しており、それは「人としての生き方」を深く考えるきっかけをも与えてくれる。

(評者：たしろ・たかひろ：文学部児童教育学科・教授)



著者：おおうち・ぜんいち
『国語教師・青木幹勇の形成過程』
Iwanami, 平成27年5月、6,000円

プロジェクト研究助成

ペリネイタル・ロスを体験した母親と助産師の交流プログラムの検証

研究期間：2015年度(1年間)

研究代表者：看護学部・准教授 渋谷えみ



【研究の背景】

周産期における子どもの死(ペリネイタル・ロス)は、あたかも子どもが存在しなかったかのように扱われ、忘れ去ることに重点が置かれていた時代から、徐々に体験者からの声が発信されるようになりました。それに伴い、周産期におけるグリーフケアに関する研究も散見されるようになりました。

5年前に茨城県内の主要周産期施設を対象に調査をしたところ、助産師のグリーフケア実施率は高いにも関わらず、ケアに対する自己評価は低く迷いを感じながらケアを提供している現状でした。また、助産師は退院後の対象者の悲嘆過程や生活の実態を理解していないことも明らかとなりました。ペリネイタル・ロスは突然の場合もありますが、近年では出生前診断で胎児異常が判明した後の死も少なくありません。告知を受けた母親の妊娠中の苦悩は明白ですが、前述のようにケアを行う助産師自身も自己の倫理観、価値観、看護観と対峙しながらジレンマを抱えている状況です。

私は2009年からペリネイタル・ロスを体験した母親らと自助グループ「玉響(たまゆら)」を運営し、体験や思いを語り合う機会を設けて活動しています。子どもを亡くした母親は、その事実を抱えながら社会生活を送る上で生じる人間関係の困難さ、家族の価値観との相違による感情のずれなど、入院中には予測もしなかったことに悩まされています。特に研究フィールドである茨城県は、首都圏に近く都市化が進む一方で、農業人口も多く3世代同居家族や地域社会との関係性も密着しているという特徴があります。その環境の中で「死」に対する文化、特に「子どもの死」に対する社会の受け止め方は、忌み嫌うもの、隠すものであるという従来の思考に起因していることも少なくありません。玉響に参加する母親は、短時間でも子どもが生きた思い出を共有した看護者と「語りたい」、そして時間を経たことで改めて感じる医療者への語れなかった思いなどを「語りたい」という思いを吐露することもあります。しかし、病院でケアに当たる助産師は、退院後に生じるこのような母親らの感情を知る術はありません。

そこで、ペリネイタル・ロスを体験した母親と助産師の交流プログラムを作成し、母親、助産師双方にとっての有効性を検証するアクションリサーチ研究を行うことにしました。

【研究の成果】

本研究では、県内主要周産期施設の助産師にも協力を依頼し、プロジェクト研究助成メンバーとして参加して頂きました。母親、助産師双方にフォーカスグループインタビューを行い、お互いがどのような気持ちを抱えているのか(前述)を明らかにしたうえで、本研究の交流会の企画運営をプロジェクトメンバーで検討しました。交流会にはペリネイタル・ロス体験者、助産師、保健師、臨床心理士を含め35名の参加があり、体験者の話に耳を傾けながらも、医療者自身も思いを吐露する場となりました。参加者からは、「元気に生まれてくることが当たり前の産科病棟では死産のケアはできていなかったことを痛感」「直接話を聞くということは本を読むのとは違います」と入ってきた」「保健所でもケアが行われていることを知り嬉しく思った」「自分のケアに自信が持てずにいたが気持ちが軽くなった」「今自分にできることを病棟で行なってみたい」など、それぞれの立場から感想が述べられました。お互いの気持ちの理解につながり、体験者を中心とした地域ケアネットワークの一助となると期待しているところです。現在、交流会参加から2ヶ月後、参加体験がどのように活かされているかを調査しているところです。「意識が変わってきた」「スタッフ間で情報共有できる場を作った」「院内でも交流会を企画していきたい」といった意見を頂いています。

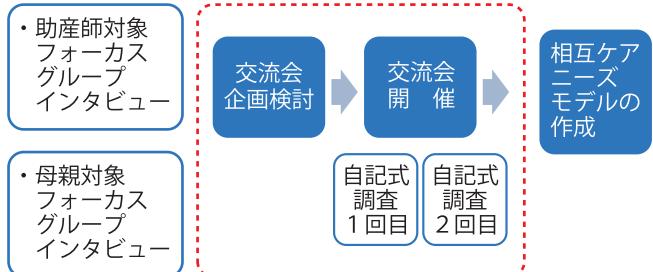


図) 本研究の全体概要

【今後の展望】

本研究の「交流会」はペリネイタル・ロス体験者と医療者との思いの隔たりを埋め、思いの共有とともに両者が抱える課題解決の一助となると考えています。今回得られた結果を基礎資料とし、今後は、交流会プログラムを含め、県内周産期施設での相互ケアニーズモデルを構築し、地域に貢献していくべきと考えています。

(しづや・えみ：看護学部看護学科・准教授)

国内外教員研修

国内研修雑感

文学部・教授 江 尻 桂 子

2015年4月から翌年の3月まで、1年間の国内研修の機会をいただきました。

まずは、このような貴重な機会を与えて下さり、研修中も様々にご支援下さった本学教職員の皆様に、心より御礼申し上げます。

研修中は、筑波大学人間系心理学域の原田悦子研究室(認知心理学)にお世話になりました。研究室には学部生・院生・ポスドクあわせて15~20名が所属し、主に高齢者の認知的特徴を解明するための実験研究が行われていました。例えば、高齢者が車を運転する際の視覚認知や運転操作にどのような特徴があるかを調べ、より安全な自動車の開発に役立てるといった研究です。また、様々な民間企業や専門機関(自動車・家電メーカー、医療機関など)との産学連携が行われており、社会とのつながりの強い研究室という印象を受けました。

なかでも興味深かったのは、高齢者にとって使いやすいモノづくりを目指したプロジェクト研究の一環として、地元の高齢者(研究協力者)の方たちから意見を伺う会(カフェ)を定期的に設けていることでした。つくば駅直結のお洒落なキャンパス(写真)に地元の方々が集い、活発に意見を交わす様子を見て、研究という観点からだけでなく大学と地域住民の交流という観点でも有意義な場だと感じました。私自身も、介護者のQOLをテーマとした話題提供を行う予定ですが、高齢者の方からどのようなご意見を頂けるのかが楽しみです。

さて、研究室を率いる原田悦子先生は、とても柔軟な人柄で、いつも優しく笑顔を絶やさない方でした(写真)。何をお尋ねしても即座にメールの返信があり、「大丈夫ですよ～」「もちろんです。喜んで!」「ぜひぜひ。お待ちしています!」など、快く応じて下さいました。学内で様々な役職をこなしながらも、丁寧に学生を指導し、ご自身も研究を続けている姿に感心しました。昨今、私立大・国立大を問わず、大学教員はますます忙しくなり、本業である教育や研究に十分な時間を割くことができない状態です。し



筑波大サテライトキャンパス(TXつくば駅直結)



サテライトキャンパス内で原田先生と

かし同じような環境のなか、原田先生がパワフルに、かつエレガントに仕事をこなされる様子を拝見し、自分自身も見習わなくてはと感じました。

さて、今年度の研究活動としては、原田研で高齢者を対象とした実験研究の手法を習得する一方、現在行っている調査研究(障がい児の家族支援)のまとめの作業を進めました。この研究は、本学の研究助成金(2011年度)や民間助成金(2012年度ユニバース研究助成金)、科学研究費(基盤C)(2013年~2017年度)を得て行ってきました。

今年度は成果発表の一つとして、日本特殊教育学会(東北大)において「心理・教育・看護の視点から考える障がい児家族支援」と題した自主シンポジウムを企画しました。シンポジストは、江尻(心理学)、松澤明美(N科・小児看護)、宮内久絵(筑波大・教育)・武居渡(金沢大・教育)の4名で、各自の専門的立場から研究報告を行いました。

全体討論においては、障がい児教育に携わる教員や、病児の家族支援に携わる研究者、当事者(障がい者の家族)などから意見があり、今回のテーマを継続して取り上げていってほしいとの声が寄せられました。また、会の終了後も数名の方からご意見や励ましのメールをいただきました。自主シンポジウムでこれほど反響があったのは、私にとっては初めてのことでのことで、この研究に対する社会からの強い期待を感じました。

ところで、障がい児者や病児者、また高齢者の介護に携わる家族が、どのようにして心やからだの健康を保ち、生活の質を維持していくのかという問題は、これまでにも指摘されてきたことです。しかし残念なことに、この問題について科学的な観点から検討した研究はほとんどありません。介護に携わる家族の支援を考えるためにには、まずは十分なデータを収集・分析し、現状を正しく理解することが大切です。この問題に対して私自身はまだ取り組み始めたばかりですが、これからも研究を進め、より良い家族支援の在り方を検討していきたいと考えています。今後もご支援いただけますよう、よろしくお願いいたします。

(えじり・けいこ：文学部児童教育学科・教授)

エディンバラでの研究生活

文学部・教授 岩間信之

私は2015年度に在外研究休暇を頂き、英国のエディンバラ大学で研究に専念しました。このような機会を頂戴したこと、心から御礼申し上げます。

エディンバラ大学のビジネススクールには、私の専門であるフードデザート(食の砂漠：以下FDs)研究で著名なJohn Dawson名誉教授と、新進気鋭のDavid Marshal教授が在籍しています。Dawson先生は、流通や地理学の分野で広く名の知られた、まさに世界的権威です。私も院生時代、先生の論文を読み漁ったものです。今回、このお二人にacademic visitorとして受け入れて頂きました。

FDs問題とは、生活環境の悪化の中で、特定のエリアにおいて住民の食生活が悪化し、健康被害が拡大する社会問題を意味します。英国では、外国人労働者を中心とした低所得者の集住地区で、FDs問題が拡大しています。一方、日本では高齢者が最大の被害者です。一般的に、商店街の空洞化などによる買い物環境の悪化(食料品アクセスの低下)が、FDsの主要因だと考えられています。一方、私たちは、家族や地域社会の希薄化(Social Capitalの低下)がFDsを強く誘引するという仮説を立てて、日本各地で検証しています。在外研究の目的の一つは、この仮説を英国で実証することになりました。

エディンバラ大学に到着して最初に感銘を受けたのは、研究に全力で打ち込む研究者の姿です。イギリスでは、大学教授も任期制です。優れた研究業績を出さなければ、契約は更新されません。そのため、みんな夜遅くまで必死に研究しています。若手研究者の競争は、一層シビアです。一方、優れた業績を出した研究者は、上位ランクの大学に移動しやすいシステムにもなっています。まさに、真剣勝負です。はじめてこの雰囲気に触れた時、全身が震えました。私も頑張らなければと心から思いました。

エディンバラでの私の一年間は、まさに研究漬けでした。毎日パンやトマトを齧りながら研究室に籠り、欧文論文の読解と論文執筆に専念しました。帰宅後は、近所の坂道を毎晩1時間ジョギングしました。



大学院生時代を彷彿とする生活でした。体重も13kg落ち、院生の頃の体形に戻りました。結局、旅行にはほとんど行けませんでしたが、充実した日々でした。研修の成果は、査読付き論文4本(1本は世界的な国際誌)と学術書1冊(私の3冊目の著書)です。論文のうち2本は、すでに受理されています。学術書は、本年6月に農林統計協会

から刊行予定です。

研究以外にも、楽しい思い出がいくつかあります。その一つが、エディンバラでの観光ガイドです。昨年8月に、私の研究仲間や院生時代の先輩、妻や彼女の友人、私の両親など総勢20名が、相次いでエディンバラに遊びにきました。この期間は研究を中断して、彼ら・彼女らに街を案内して回りました。それまで私は、部屋と研究室を往復する生活を送っていたので、エディンバラの観光スポットを知りませんでした。そこで、慌てて街の歴史や地理、雰囲気の良いパブの所在などを調べました。努力の甲斐もあり、街歩き当日は、プロの観光ガイドに後れを取らない活躍だったと自負しています。また、1月には、日本のFDs問題に興味を持つ韓国のテレビ局(ナショナルジオグラフィック・コリア)が、私を取材するためにエディンバラにやってきました。韓国の高齢者に関する特集番組を制作中なのさうです。私とDawson先生のミーティングも、撮影していました。私の下手クソな英語が韓国で放映されると思うと、冷や汗ができます。このテレビクルーにも、取材の後で、半日ほどかけて街を案内しました。

エディンバラ大学の教授陣やvisitorたちとの交流も、良い思い出です。なかでもDawson先生には、公私ともに本当にお世話になりました。「Nobuyukiは私の最後の指導学生だな」と笑顔でおっしゃった先生の言葉は、一生忘れられません。先生の弟子の名に恥じぬよう、これからも研究に邁進する所存です。

最後に、サバティカルの検討課題を指摘させて頂きます。イギリスは物価が高いこともあり、私は本当に貧乏をしました。文字通り、貯金をすり減らしながらの生活でした。一方、日本から来ていた他大学の先生方は、経済的に恵まれた環境にありました。大学間格差に、愕然としたものです。この悔しさが、私が研究に専念するバネでした。しかし、これ



から研修に出られる先生方のことを考えると、本学におけるサバティカルの研修費用を再検討する必要があると、強く感じます。ご検討いただけると幸いです。

(いわま・のぶゆき：文学部文化交流学科・教授)

海外研修雑感

看護学部・准教授 松澤明美

私は2015年度、本学の教職員長期在外研修プログラムの支援により、米国・University of Minnesota School of Nursing(以下、ミネソタ大学看護学部)に客員研究員として滞在する機会をいただきました。

研修先としてミネソタ大学看護学部を希望したのは、いくつかの理由があります。わが国では今、10~20年前であれば生存さえできなかった子どもや長期入院を余儀なくされていた子どもが家族とともに暮らせるようになりました。私はこの数年来、重度の病気・障がいをもつ子どもと家族へコーディネートされたケア・サービスを提供するためには何が必要か。そしてそのために看護が果たすべき役割は何かということを考えてきましたが、この答えを見いだせないままでした。そこでこの機会に研究を進め、この問い合わせへの答えを見つけたいと考え、特別なヘルスケアニーズをもつ子どもと家族へのケア・コーディネーションの問題に、看護学の立場から先駆的に取り組み、多くの研究成果を発信するDr. Wendy Looman氏とProf. Ann Garwick氏が所属するミネソタ大学看護学部で研究したいと思いました。また日々の教育活動でも悩ましく思う中、世界の看護を牽引する米国の看護学教育の実際にも触れたいと考えました。

ミネソタ大学看護学部は、米国の中西部・北に位置するミネソタ州の州都・ミネアポリス市のミネソタ大学ツインシティ校にあります(州の二大都市のミネアポリス市・セントポール市を通称ツインシティと呼ぶ)。広いキャンパスの中央には雄大なミシシッピ川が流れ、四季折々の景観を見せてくれます。看護学部は1909



キャンパス中央を流れるミシシッピ川



看護学部のビルディングにある看護学部設立100周年の壁画

年に設立された米国では最古の4年制の看護学部であり、学部、大学院の修士・博士課程、Doctor of Nurse practitionerコースの4つの教育プログラムをもち、米国の看護学・看護学教育においてリーダーシップを發揮しています。

研修期間中は多大な周囲のサポートを得ながら、研究・

実践の双方から重度の病気・障がいをもつ子どもと家族へのケア・コーディネーションの問題に取り組みました。メンターのDr.Looman氏とのミーティングを通じて、米国とミネソタ州における病気・障がいをもつ子どもと家族へのケア・コーディネーションのシステムと実践への理解を深め、ケア・コーディネーターの専門職を対象とした共同研究を開始しました。実践面ではミネソタ大学病院内の2つの先天奇形をもつ子どものクリニックへの継続的な見学と多職種カンファレンスへの参加の他、ツインシティにある様々な小児専門病院、プライマリーケア・クリニック、学校での多職種連携を含む看護職の実践の見学と関係者へのインタビュー、また同州にある医療やビジネスモデルとしても先駆的実践を行うメイヨークリニックの小児ナースケア・コーディネーターへのインタビュー



メイヨークリニック小児外来の森をイメージした待合室

さらに教育に関しては、学部での看護基礎教育、Doctor of Nurse Practitioner コースの講義や演習とそのための教員のミーティング、臨床実習、小児・家族看護学領域の研究会、学部の様々な行事にも参加させていただきました。

これらの機会を通じて、研究に関しては渡米前の疑問に現段階での自分なりの答えが得られ、次に研究として取り組むべき課題を見出すことができました。限られた時間ながらも、その場に身を置いて生活し、専門職に限らない様々な人々と直接かかわる体験ができたからこそ、米国の医療・看護のシステムやそれに基づき提供されるケア・サービスについて、文献を読んだだけでは得られない理解が可能になったように思います。さらにこれらの機会により、あらためて看護とは何かということ、看護を学ぶ学生を育てるここと、大学人として仕事をすることについて、強く考えさせられました。初めての海外生活の経験が与えてくれる影響も大きく、研究だけではなく、教育や仕事への向き合い方などを含めて、今後の自分自身の目標がより明確になったことも研修の一つの成果と思っています。

最後になりましたが、在外研修を了解していただきました学部長・山本真千子教授、研究科長・津田茂子教授ならびに看護学部の先生方、滞在をご快諾いただき、1年間の研究生活を支援していただいたDr. Wendy Looman氏とProf. Ann Garwick氏をはじめ、ミネソタ大学看護学部の教職員および関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

(まつざわ・あけみ：看護学部看護学科・准教授)

教育研究センター、この一年 教育研究センターの2015/4～2016/3をクロニクル風にまとめました。

2015年



4月4日(土) 13:45～16:30

第1回 研究倫理に関する講習会

講 師：有江 文栄 氏

(本学倫理審査委員会委員、
上智大学生命倫理研究所員)

テーマ：「人を対象とする医学系研究に
関する倫理指針」解説

講 師：柳沼 壽

(経営学部・教授、
本学教育研究センター長)

テーマ：「茨城キリスト教大学
研究倫理指針について」
「研究における不正行為」「研究費の
不正使用」に関するガイドラインに
ついて」

2016年

2月19日(金) 13:30～16:45

ICコロキアム 学内研究会

発表1

「疾患および症状を予防・改善する
積極的看護介入方法の確立に向けて」

後藤 慶太 氏

(看護学部看護学科・助教)

発表2

「障害児教育史の研究

－障害のはっきりしない子どもの歴史』

吉井 涼 氏

(文学部児童

教育学科・

講師)



10月26日(月) 14:00～15:00

第2回 第1部 研究倫理に関する講習会

講 師：有江 文栄 氏

(本学倫理審査委員会委員、
上智大学生命倫理研究所員)

テーマ：「研究計画書の作成に向けて
—倫理的観点から」

10月27日(火) 15:00～16:00

第2回 第2部 研究倫理に関する講習会

講 師：新谷由紀子氏

(筑波大学・准教授、筑波大学利益
相反・輸出管理マネジメント室)

テーマ：「大学における
利益相反マネジメント」



編集後記

教育研究センターのNewsletter Vol.3を刊行する
ことができました。二つの研究所報告、大学院研究
科報告、ICコロキアム、出版助成、など定例報告に
加えて、今回は江尻先生と松澤先生による内外研修
報告と前回に統いて岩間先生のエッセイを載せるこ
とが出来ました。センター助成プロジェクトの経過
報告も今後の成果が楽しみです。

発行責任者としてセンターのスタッフに支えられ
て何とか任期を終えることが出来ることに改めてお
礼を申し上げます。
(柳沼)

教育研究センターNewsletter Vol.3 2015

発 行 者 茨城キリスト教大学 教育研究センター

発行責任者 柳 沼 壽

発 行 日 2016年3月25日

印 刷 日立高速印刷株式会社